

2006年5月16日

一部 ラルス・ニルソン 作品上映と解説

二部 ”ヨーロッパから日本が見えるーアートを取りまく
状況など“

ゲスト：ラルス・ニルソン Lars Nilsson

1973年、スウェーデン生まれ。ウメア・アート・アカデミーにて美術修士。ストックホルム近代美術館や、レベッカ・ゴードン・ネスビットなどによる映像プログラムにてヨーロッパ各地で展覧会に参加。2004年、IASPISにてレジデンス。2005年、IASPISの新ディレクター、マリア・リンドとシンポジウムを共同で企画、参加する。

ニルソンの作品は、いつも資本主義社会の中での企業とその中で働く人々の日常を、少し力の抜けた目線で見つめる。今回は、アニメーション作品“ニュービジネス”のエピソード1から3と、新しい雇用環境で働くクリエイターたちのインタビュー作品をお見せします。(日本では初公開作品となります) <http://www.larsnilsson.net/>

● 一部 6:00-7:00

ラルス・ニルソンによるスクリーニングとレクチャー

New Business, Episode 1 (6 min)

New Business, Episode 2 (6 min)

New Business, Episode 3 (6 min)

Interview with Kokokaka (16 min)

IO Design Office (19 min)

● 二部 ラウンドテーブル

ゲスト：

池田光宏（アーティスト）、岡田裕子（アーティスト）、瀧健太郎（アーティスト）

ト、ビデオアートセンター主宰)、ビークル (アーティスト)、松本力 (アーティスト)、もとみやかをる (アーティスト)、ラルス・ニルソン (アーティスト)

三回を迎えたこの“ウェルカム・トゥ・ザ・リアル・ワールド”シリーズを通じて、ミアカは意識的に社会へのなんらかのメッセージや、もしくは日常の出来事について考えさせられるようなものを含んだ作品をスピーカーに選んでいただきました。

第一回目には、インターネットを中心とした情報社会で、ネットの中にただよう情報の流通と新しく再循環している状況や、ビデオゲームをハッキングしたもの、実はわかりやすいインターフェイスで人々が使いこなしていると思っているコンピューターやゲームやネットというものが、見えない権力や企業によって個人の情報を盗み見るツールとなり、また与えられる情報も選別されている、という現実を気づかせるような若いアメリカの作家たちの作品。

二回目には、主にヨーロッパにおけるコミュニティの、素晴らしい大義とそれに反する現状や、ポストコロナリズムを、ユーモアを交えて、あるいは詩的に表現したベルギー在住作家たちの作品。

三回目の今回、ミアカのもう一つの戦略目標である、“美術を考えるディスカッションのプラットフォーム” 作りのため、日本と欧米をテーマに一回目のラウンドテーブルを行います。

数年前にドイツのキュレーターが日本作家のリサーチのために来日していた際、“なぜ日本にはポリティカルなテーマをあつかった作品が少ないのか？ 探るのがとても難しい” と言っていました。(結局彼は椿昇やヤノベケンジらを展覧会に招待しましたが、もっと多くの若い作家がいると考えていたようです)

少なくとも、日本人は“ゴールデンリセッション (豊かな不況)” といわれるように、物質的に豊かな現状に満足していて、またさしせまったなにかの危機や、移民や難民問題、そういったものがなく (見えにくいだけかもしれませんが)、そのへんから端を発しているのではないのでしょうか。

もしくは、学術的にも他のアジア圏にも近しいものがない特異な文化 (サミュエル・ハンチントンによれば) と、それに加えて単一民族、単一言語という特性が関係しているのかもしれませんが。集団の中で安心する、主語を言う必要がない言語、“あ、うん” “以心伝心” に代表される、非言語で相手を理解する文化などでしょうか。

日本に於いての作品がうまれる土壌や、その発表の機会、評価、アーティストの社会的地位と美術の社会への影響力、そういうものは実は日本を離れて見えてくるものでしょう。今回は、

海外に滞在したり、展示したりといったご経験のある作家の方々をお招きして、実際に美術を取り巻く環境がどう違うのか、批評の現場はどう違うのか、またニルソンさんにもスウェーデンでどうなのか、といったことも含めてのラウンドテーブルを行います。ご来場の方々にもぜひ意見をいただきたいと思えます。

もうひとつディスカッションしたいテーマは、現代美術がわかりにくい、という批判または偏見です。これは石原都知事がカルティエ財団の展覧会のレセプションでのスピーチで、“今日は素晴らしいものが見られると思って来たが、見るべきものはなにもなかった。——説明を要する現代美術は無に等しい云々”という発言です。

数々のこの発言に関するブログで、(ちなみに大きなメディアで取り上げたところは無かったようです。ニュースバリューもない現代美術...) この部分、つまり現代美術のわかりにくさについて、石原さんが言っている事は正しい、といった意見もありました。でも本当にそうなのでしょう。では、印象派の作品は説明がなくてわかるのでしょうか。当時いかにそれらが先鋭的であったかは、歴史背景を知らないとわかりません。同時代のものは、それだけでわかりやすいはずです。

世の中一般のそういう見方が緩和しない限りは、今年9月からの指定管理者制度の実施のもと、日本の現代作家の発表の場は失われ、日本の国公立の美術館やホールでは、どんどん陳腐なテーマ、みんながすでに知っている名画や、クラシック、人気アニメ、ポップカルチャーなどの展覧会ばかりになっていくことでしょう。優秀な作家は皆海外に住まいと発表の場を求めて流出してしまうでしょう。それは横浜が提唱する“クリエイティブシティ(創造都市)”において、クリエイティブな人材を惹き付ける大きな要因である文化のある街作りからも正反対の動きです。かの地横浜で考えるにふさわしいテーマでもあると考えています。

いくつかの問題(文化、社会制度、都市問題、西欧-東洋、欧米-日本など)を並列したせいでいささかわかりにくくなっていますが、みなさんと共に解きほぐせたらと思えます。

—日本とヨーロッパ 作品が生まれる文化的土壌
批評、レビュー、美術マスコミについてと、作品評価の場
制度、社会システム、活動のしやすさ
アーティストの社会的地位

美術館やギャラリー、発表の場と販売の場、コレクター

- 日本ってポリティカルな作品が少ない??
- (海外) アーティストインレジデンスは日本人(アジア)アーティストの成功の鍵なの?
- 美術館やマーケットはやっぱり欧米が進んでる?

ここから先は、時間が許せば

- 現代美術ってやっぱりわかりにくいんだろうか、マジョリティから敬遠されるんだろうか
- 説明の必要な芸術作品は“無に等しい”の?
- クリエイティブシティは日本にも創造可能?

池田光宏 <http://www2.odn.ne.jp/superplain/ikeda/index.html>

2003年と今年の越後妻有トリエンナーレ、水戸芸術館こもれび展、ストックホルム”Moving Japanese”展などに参加。夜の街角、窓に映す池田の映像のインスタレーションは、人々の窺視の欲望を刺激する。今年秋からは、スウェーデンのレジデンスにパートナーの小木曾瑞枝と共に参加予定。

岡田裕子

2005年東京都現代美術館MOTアニュアル展、ストックホルム “No Ordinary”展、東京都写真美術館”Love's Body”展、イギリス他での”Sex and Consumerism”展など。ロンドンとニューヨークにアーティストとして滞在。ジェンダーをテーマにしたフォトコラージュ作品から、ここ数年は映像作品に移行し、フェイクドキュメンタリー作品やミュージカル風スプラッタ主婦映像作品など制作。夫である会田誠と息子とでの”会田家”としてのプロジェクトも。

瀧健太郎 <http://www.netlaputa.ne.jp/~takiken/>

2002年から二年間、ドイツ・カールスルーエ工造形専科大でメディアアートを学ぶ。ビデオ作品やインスタレーション、パフォーマンス、執筆活動などの傍ら、展覧会の企画、プロデュースを行う。国内展にキリンコンテンポラリーアートアワード('98)、福井ビエンナーレ8('00)、フィリップモリスアートアワード('02)、Ongoing展('02)、from Scratch('05)他海外上映など多数。NPO法人ビデオアートセンター東京主宰。

ザ・ビークル http://www.vehicle-plus.co.jp/the_vehicle_website/profile.html

企業経営（ビークルプラス）、デザインなど多才な活動をする二人組のユニット。現在丸ビルで展示しているのは、車窓を流れる風景を日常と非現実の境界と時間の流れを感じさせる映像作品” 90 mph”。日常にあるオブジェクトからモチーフを流用する作品が多く、70年代に愛着深し。2001年ウイーンにて展覧会。

松本力 <http://home.p05.itscom.net/all/aLLFiles/matsumoto.html>

手書きで作成された「ローテク」のアニメーションに加え、オルガノラウンジや宇治野宗輝らが奏でる音楽が不思議な調和を作品に与えている、異ジャンルのアーティストとのコラボレーションも多く、ファッションショーの演出や演劇公演での上映、VJなどその活動は幅広い。

中でも、オルガノラウンジの音楽にはVJとして参加し、アニメーションライブを継続して行っている。展覧会、パフォーマンス多数。ロンドンで滞在制作を行い、2006年イギリスのアーティストらと共にトーキョーワンダーサイトにて” Fuckin’ Brilliant!! マジヤバい！”を企画、参加。

もとみやかをる http://www.ntticc.or.jp/Biography/Motomiya_k/index_j.html

1998年、フィリップモリスアートアワード大賞を受けて「Emerging Artists From Japan」展（グレイ・アート・ギャラリー、ニューヨーク）に出品。また、2000年度ACC奨学金により渡米。アメリカ、カナダのレジデンス・プログラムで研修と制作発表などを行った。レジデンス経験多数。昨年はウイーンのMAKでの金継ぎに関するレクチャーや、タイでのグループ展に参加。もとみやの作品は、繭や毛皮など触覚を呼び覚ます繊細な素材を使った”キモ可愛い”作品から、最近の金継ぎプロジェクト、摂食障害や食品を扱った作品などモノと社会、人をテーマにしている。